フランス語の疑問詞疑問文における文体的倒置について*

平塚　徹

1. はじめに

1.1. 疑問詞疑問文における倒置

フランス語の疑問詞疑問文には，様々な構文が存在する．先ず，主語が主語代名詞の場合には，(1)のように主語代名詞を定動詞や助動詞の後に付加したものがある．

(1)　Quand arrivera-t-il?

これに対して，主語が一般の名詞句の場合には，(2)のように主語名詞句を右方向へ移動したものや，(3)のように主語名詞句と同じ性数の三人称主語代名詞を定動詞や助動詞の後に付加したものがある．

(2)　Quand arrivera François?
(3)　Quand François arrivera-t-il?

以下，前者を文体的倒置，後者を複合倒置と称する．

(1)のような主語代名詞の倒置と(2)のような一般の名詞句の文体的倒置では，一見，主語が同じ位置にあるように見えるが，全く異なった統語操作である．例えば，助動詞と過去分詞からなる時制形式である複合過去の場合，主語代名詞は，倒置すると助動詞の直後に来て，《助動詞＋過去分詞》全体の後に来ることはない．

(4)　Qu'a-t-elle fait? (Kayne, 1972, p. 72)
(5)　* Qu'a fait-elle? (*ibid.*)

---

* 本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金(奨励研究(A)課題番号 12710289)の助成を受けて行われた研究の成果の一部である．

それに対して，一般の名詞句は《助動詞＋過去分詞》全体の後に来て，助動詞の直後に来ることはない．

(6)　* Qu'a cette femme fait? (*ibid.*)
(7)　Qu'a fait cette femme? (*ibid.*)

不定詞を伴う動詞の場合にも，主語代名詞は定動詞の後に来るのに対して，一般の名詞句は不定詞より後に来る．

(8)　Que voulait-il manger? (*idem*, p. 72)
(9)　* Que voulait manger-il? (*idem*, p. 71)
(10)　* Que voulait ce jeune homme manger? (*idem*, p. 72)
(11)　Que voulait manger ce jeune homme? (*idem*, p. 71)

よって，主語代名詞の倒置と文体的倒置は全く異なったものなのである．

複合倒置や文体的倒置の他に，est-ce que を用いるものや，更には，口語フランス語も考慮すると，疑問詞疑問文には様々なパターンが存在するが，本稿では，主語が一般の名詞句の場合に限定して，特に文体的倒置の特性を，複合倒置と対比しながら考察する．

1. 2. Korzen (1983, 1990, 1996)

疑問詞疑問文における文体的倒置に関する先行研究のうち，特に Korzen によるものをここであらかじめ見ておく．

先ず，wh 句が pourquoi である場合には，文体的倒置は不自然で，複合倒置を適用しなければならない．

(12)　* Pourquoi partira cette petite? (Korzen, 1983, p. 52)
(13)　Pourquoi cette petite partira-t-elle? (*ibid.*)

このことは，他の wh 句では文体的倒置が可能であることと著しい対照を成している．

(14)　Qui est cette jolie fille? (Korzen, 1990, p. 60)
(15)　Que fera Jean-Michel? (*ibid.*)
(16)　A quoi pense votre frère? (*ibid.*)

(17) Quand reviendra votre belle-mère? (*ibid.*)
(18) Où est allé ce train? (*ibid.*)
(19) Comment va votre fils? (*ibid.*)
(20) Combien mesure cette table? (*ibid.*)

Korzen (1983, 1990)によると，これらの wh 句は文で表された事態の構成要素を表しているのに対して，pourquoi は原因を示す副詞であり事態の構成要素ではない．このことから，文体的倒置は事態の構成要素を表す wh 句を文頭に持ってきたときに可能であると結論付けている．これにより，yes-no 疑問文においても文体的倒置が不可能であることが説明される．

(21) * Partira cette petite? (Korzen, 1983, p. 52)
(22) Cette petite partira-t-elle? (*ibid.*)

なぜなら，yes-no 疑問文においては wh 句の前置を伴わないからである．

ところで，疑問詞疑問文の文体的倒置においては，倒置主語の後に他の要素が来ることがあるが，これに関しても，Korzen (1983, 1996)は重要な制約の存在を指摘している．それによると，文頭に出ている wh 句よりも動詞との結びつきの強い要素が倒置主語の後に現れることはできないのである．ただし，直接目的語がもっとも動詞との結びつきが強く，間接目的語はそれより弱く，場所や時を表す句は更に弱い．例えば，次の例文を見られたい．

(23) Que dira Pierre à Micheline? (Korzen, 1983, p. 80)
(24) * A qui dira Pierre la vérité? (*ibid.*)

(23)では，文頭の wh 句は直接目的語で，主語の後に現れているのは間接目的語である．よって，主語の後の要素は wh 句より動詞との結びつきが弱いので問題ない．ところが，(24)では，逆に，wh 句は間接目的語で，主語の後の要素は直接目的語である．よって，wh 句よりも動詞との結びつきの強い要素が主語の後に現れていることになり，許容されない．次の例も同様に説明される．

(25) A qui parlera Pierre demain? (*ibid.*)
(26) * Quand parlera Pierre à Paul? (*ibid.*)

(25)は，間接目的語である wh 句よりも動詞との結びつきの弱い時の副詞が主語の後に現れているので問題ないが，(26)は，時の副詞である wh 句よりも動詞との結びつきの強い間接目的語が主語の後に現れているので許容されない．

wh 句よりも動詞との結びつきの弱い要素は，倒置主語の前にも現れることができる．例えば，以下の文では，文頭の wh 句は直接目的語であるが，それよりも動詞との結びつきの弱い間接目的語や時の副詞が倒置主語の前に現れている．

(27) Que dira à ses électeurs le ministre qui a été pris, la semaine dernière, en flagrant délit de fraude fiscale? (Korzen, 1996, p. 62)

(28) Que dira demain le directeur dont l'usine a été incendiée par un groupe de terroristes? (*ibid.*)

ただし，このためには主語がある程度長くなければならない．

1.3. 焦点化としての文体的倒置

さて，主節平叙文における文体的倒置は，従来から，主語名詞句の焦点化の操作と考えられている(cf. 東郷・大木, 1986)．これに対して，文体的倒置による疑問詞疑問文においても，主語名詞句が焦点であるとする考え方が存在している．丹羽(1982)は，主節平叙文に限らず，関係節や疑問詞疑問文の場合も含めて，文体的倒置を主語名詞句の焦点化と見なしている．例えば，次の文を見られたい．

(29) ? De quel œil voit double celle-ci? (Kayne, 1972, p. 103)

Kayne によると，(29)の倒置主語 celle-ci は，前方照応的な解釈より，直示的な解釈の方が容認度が向上する．これは丹羽(1982, p. 32)によると，直示的用法は，前方照応的用法と異なり新情報を表すので，焦点として機能しうるからと説明される．

文体的倒置による疑問詞疑問文の主語名詞句が焦点であるとする仮定には，他にも利点がある．例えば，主節平叙文では，直接目的語名詞句がある場合，文体的倒置が困難であることが知られている[1)]．

---

1) 東郷・大木(1986)での例文の評価は，(＋＋) très naturel, (＋) naturel, (0) moyennement naturel, (−) peu naturel, (− −) pas naturel du tout の５段階評価で，９人のインフォーマントのそれぞれの回答を＊で示してある．

(30) Là surveillaient une dizaine de gendarmes le magasin.
(＋＋)　(＋)　(0)　(–) ****　(– –) *****
(東郷・大木, 1986, p. 6)

(31) Là surveillaient le magasin une dizaine de gendarmes.
(＋＋)　(＋)　(0)　(–) ***　(– –) ******
(*ibid.*)

これは，東郷・大木(1986, pp. 6-8)によると以下のように説明される．先ず，倒置された主語は焦点として解釈される．ところが，直接目的語も焦点として解釈されやすい．よって，両者が共存すると，どちらを焦点にするのか，ストラテジー上の矛盾が生ずるために不自然になるのである．一方，疑問詞疑問文においては，直接目的語名詞句があると，複合倒置は自然だが，文体的倒置はやはり不自然である．

(32) Où Jean-Jacques a-t-il rencontré Valérie? (Le Goffic, 1997, p. 26)
(33) * Où a rencontré Jean-Jacques Valérie? (*ibid.*)
(34) * Où a rencontré Valérie Jean-Jacques? (*ibid.*)

(33)に関しては，文頭の wh 句である場所の副詞よりも動詞との結びつきの強い直接目的語 Valérie が倒置主語 Jean-Jacques の後に現れているので，1.2.節で説明した Korzen の制約によって排除できる．しかし，(34)は，Korzen の制約に違反していないにもかかわらず，やはり不適格である[2]．これは，疑問詞疑問文の文体的倒置が主語の焦点化と考えれば一見説明できそうに思われる．

また，主節平叙文の文体的倒置においては，直接目的語があっても，それが代名詞化されると，容認度が向上する．

(35) * A la sortie du théâtre attendaient une foule d'admirateurs les acteurs.
(東郷・大木, 1986, p. 9)
(36) A la sortie du théâtre les attendaient une foule d'admirateurs. (*idem*, p. 10)

---

2) 動詞が間接目的語や時の副詞を伴っている場合には，(27)や(28)で見たとおり，主語を長くすれば文体的倒置が可能である．しかし，直接目的語の場合には，主語を長くしても文体的倒置は困難である．

(i) * Où mettra ses livres cette fille? (Kayne, 1972, p. 105)
(ii) *? Où mettra ses livres la fille qui est entrée en retard? (*ibid.*)

これは，東郷・大木(1986)によると，直接目的語が代名詞化されると焦点として機能しなくなるために，倒置主語が焦点であることと矛盾しなくなり，その結果，文体的倒置が可能になるのである．

一方，疑問詞疑問文においても，文体的倒置は直接目的語の代名詞化によって，容認度が向上する．

(37) * Où ont mangé la tarte les invités? (Muller, 1984, p. 350)
(38) Où l'ont mangée les invités? (*ibid.*)
(39) * Quand a vu les gens Paul? (*ibid.*)
(40) Quand les a vus Paul? (*ibid.*)

主節平叙文での文体的倒置と疑問詞疑問文での文体的倒置のこのような平行性は，疑問詞疑問文においても文体的倒置が主語名詞句の焦点化であると仮定すれば，一見，説明できそうに思われる．

1.4. 焦点化説の問題点

ところが，従来から，疑問詞疑問文においては疑問詞が焦点であるという考え方もあった．これは，疑問詞疑問文から疑問詞を除いた残りの部分が前提を表しており，疑問詞が新たに情報を要求している部分であることから，自然に出てくる考え方である．

これは，疑問詞が焦点として標示されている言語があることからも支持される[3]．また，疑問詞疑問文が疑問詞を焦点とする分裂文の構造を示す言語も存在する．例えば，Lambrecht and Michaelis (1998) も指摘するとおり，口語フランス語に見られる(41)のような疑問詞疑問文においても，疑問詞は分裂文の焦点の位置に現れている．

(41) C'est QUOI que tu fais? (Lambrecht and Michaelis, 1998, p. 512)

以上より，疑問詞疑問文では疑問詞が焦点であると考える方が良いと思われる．

さて，疑問詞疑問文の焦点は疑問詞だと考えると，フランス語の疑問詞疑問文における文体的倒置は，主語の焦点化の操作であるとは考えられなくなる．実際，以

---

3) この点に関しては以下の文献を参照されたい．Givón (1979, pp. 246-248)，Dik (1997, pp. 335-336)，Comrie (1981, p. 63)，Croft (1990, pp. 169-170, p. 272)，Givón (1990, pp. 714-715)，Raymond and Homer (1996)，Lambrecht and Michaelis (1998, pp. 511-513)．

下の対話を見ても，疑問詞疑問文の倒置主語は，先行する文の主語を受けており，焦点とは考えにくい．

(42) A: Jean a téléphoné.
B: Quand a téléphoné Jean? (Rochemont and Culicover, 1990, p. 113)

また，次の文は電子コーパス *DISCOTEXT 1* で８例確認されたが，主語の指示代名詞 cela は前方照応的に解釈される．

(43) D'où vient cela?

この指示代名詞は，主題性が高く，焦点とは考えにくい．このことは，主語の焦点化である主節平叙文における文体的倒置では，cela が不自然なことからも言える．

(44) ? De là vient cela.

これが容認されうるのは，«De là vient cela: ...» のように，後方照応の場合であり，前方照応的な解釈は困難である(cf. 東郷・大木, 1986, p. 10)．

これらの観察から，文体的倒置による疑問詞疑問文の主語は，焦点とは考えられない．

以下，第２節では，フランス語の疑問詞疑問文における文体的倒置は，焦点ではなく，むしろ主題に対して適用される操作であると考えられることを示す．更に，第３節では，この考え方では説明できない現象を考察し，文体的倒置と複合倒置に対するより適切な制約を提案する．

2. 主語の主題性

2.1. 不定代名詞 quelqu'un

さて，文体的倒置による疑問詞疑問文は，主語が不定代名詞 quelqu'un だと容認しにくい．

(45) Qu'a mangé Pierre? (Cornulier, 1974, p. 157)
(46) ? Qu'a mangé quelqu'un? (*ibid.*)

主語が quelqu'un の場合には，複合倒置の方が望ましい．

(47)　? Quand est venu quelqu'un? (*ibid.*)
(48)　Quand quelqu'un est-il venu? (*ibid.*)

このことに関して，Korzen (1983, p. 82)は，不定の何かについて質問することはおかしなことであり，文体的倒置においては，倒置された主語ははっきりとした「個体」を指して，それについて情報を要求できるようにしなければならないと述べている．これは，換言すると，quelqu'un が疑問文の主題になりえないために文体的倒置が適用できないのだということになる．quelqu'un が主題になりえないことは，左方転移できないことからも明らかである．

(49)　? Quelqu'un, il a mangé ça. (Cornulier, 1974, p. 160)
(50)　* Quelqu'un, depuis quand m'attend-il? (Kayne, 1972, p. 82)

quelqu'un は，主節平叙文でも疑問詞疑問文でも左方転移できないことから，いずれにしても主題になりえないと言える．

この点で興味深いのは，東郷・大木(1986, p. 13)が，主節平叙文では，不定代名詞に文体的倒置を適用することが可能だと述べていることである．

(51)　Enfin arriva quelqu'un. (東郷・大木, 1986, p. 13)
(52)　De la fenêtre s'échappa quelque chose. (*ibid.*)

主節平叙文での文体的倒置は主語の焦点化の統語的操作であるので，不定代名詞は焦点になりうることになる．そうすると，疑問詞疑問文において不定代名詞に文体的倒置が適用できないことは，文体的倒置を焦点化の操作と仮定することでは説明できない．むしろ，主語が主題である場合に文体的倒置が適用できると考えることによって説明できるのである．

さて，上述のような現象は，日本語の疑問詞疑問文で主語を主題にできるかどうかということと比較することができる．例えば，主語が不定の「人」だと，主題化は困難である．

(53)　いつ太郎が来ましたか.
(54)　太郎はいつ来ましたか.
(55)　いつ人が来ましたか.
(56)　? 人はいつ来ましたか.

なお，ここでは，少なくとも表層の語順の相違はあまり重要ではない．なぜなら，「人」が主題になっていれば，語順に関係なく不自然だからである．

(57)　いつ太郎は来ましたか.
(58)　? いつ人は来ましたか.

このことは，この後の議論においても成り立つ.

以上より，フランス語では疑問詞疑問文の文体的倒置は主語が主題であるときに適用されると仮定すると，疑問詞疑問文において quelqu'un を倒置しにくいことが説明できる.

2. 2. 前提と倒置

次の二つの疑問文を比較されたい.

(59)　Quand ton fils est-il mort? (Cornulier, 1974, p. 158)
(60)　Quand est mort ton fils? (*ibid.*)

Cornulier (1974, p. 158) は，複合倒置による (59) に比べて，文体的倒置による (60) の方は，「信じられない出来事だ」という感情が出ていなくて，「思いやりに欠ける」言い方に思われると述べている．これに対して，「君の息子」を「ナポレオン」に入れ替えた場合には，ナポレオンの死は歴史上の事実なので，「信じられない出来事だ」という感情の出ていない (62) の文体的倒置でも問題ない.

(61)　Quand Napoléon est-il mort? (*ibid.*)
(62)　Quand est mort Napoléon? (*ibid.*)

ところで，(59) や (60) は「君の息子が亡くなった」という前提を，(61) や (62) は「ナポレオンが死んだ」という前提を有している．よって，上記の観察は，前提に対して驚きを示すには，文体的倒置は適用してはならないと言い換えることができる.

さて，前節で，複合倒置による疑問詞疑問文と文体的倒置による疑問詞疑問文を，それぞれ日本語の (63) と (64) のようなパターンの疑問文と比較した.

(63)　[疑問詞] ＋ [主語]**が** ＋ [動詞] (...).
(64)　[主語]**は** ＋ [疑問詞] ＋ [動詞] (...).

ここでも，同じような比較をすることが可能である．例えば，(65)のように「息子さん」を主題化していない場合は，前提に対する驚きが感じられるが，(66)のように主題化した場合は驚きが感じられない．

(65)　いつ息子さんが亡くなったのですか．
(66)　息子さんはいつ亡くなったのですか．

これに対して，「ナポレオン」の場合は，主題化されていないと却って不自然ですらある．

(67)　？いつナポレオンが死んだのですか．
(68)　ナポレオンはいつ死んだのですか．

Le Goffic (1997)は，疑問詞疑問文において，前提を疑問に付したり，棄却したりする場合は，文体的倒置でなく，複合倒置が適用されると主張している．例えば，(69)と(70)を比較されたい．

(69)　Depuis quand un enfant de douze ans fume-t-il? (Le Goffic, 1997, p. 40)
(70)　* Depuis quand fume un enfant de douze ans?[4] (*ibid.*)

これらの疑問文は，「ある時から１２歳の子供が煙草を吸うようになった」という前提を有している．ところが，この前提を棄却する「１２歳の子供が煙草を吸うようになった訳がない」という解釈では，(69)は自然だが，(70)は容認されない．前提が棄却される疑問詞疑問文はいわゆる修辞疑問文に相当する．Le Goffic (1997)によると，このような修辞疑問文も含め，前提が疑問に付されたり，棄却されたりする疑問詞疑問文では，文体的倒置ではなく，複合倒置が適用されるのである．

ところで，(69)は実際に１２歳の子供が煙草を吸っているのを見てなされる発話であるから，前提は棄却されていないと思われるかも知れない．しかし，主語名詞に不定冠詞が付いていることや動詞が現在時制であることから，前提の内容は特定の子供が煙草を吸ったという事実ではなく，一般論，つまり「１２歳の子供も煙草を吸ってもよいようになった」という規範に関するものであると考えられる．このような前提を棄却することと，実際にある１２歳の子供が煙草を吸っていたという

4) Le Goffic はこの文にアステリスクを付けているが，これは意味的に容認されないことを示すためのものである．

事実は矛盾しない[5]．これは，１２歳の子供が煙草を吸っているのを見て(71)のように言うことができるのと同じことである．

(71)　Un enfant de douze ans ne fume pas.

さて，(69)と(70)も日本語の疑問文と対比することができる．

(72)　いつから１２歳の子供が煙草を吸うようになったんだ．
(73)　?１２歳の子供はいつから煙草を吸うようになったんだ[6]．

日本語の場合でも，前提を棄却する「１２歳の子供が煙草を吸うようになった訳がない」という解釈では，主語が主題化されている(73)に比べて，主語が主題化されていない(72)の方が自然である．

以上の観察から，疑問詞疑問文の前提に対して，驚きを示したり，疑ったり，あるいは棄却したりする場合には，フランス語では文体的倒置が不自然になり，日本語では主語の主題化が困難になると言える．

2.3. 前提と主語の主題性

野田(1996, p. 124)は，「文が表す内容に意外性や驚きがある」場合には，主題を持たない文になりやすいと述べている．実際，太郎の入院が全く問題になっていなかった場合に太郎の入院を述べるには，主題化を行わない方が自然である．

(74)　太郎が入院した．
(75)　太郎は入院した．

Lambrecht (1988, pp. 170-171)も，以下のような新聞記事の冒頭の文を引いて同様のことを述べている．

---

5) 仮に話し手が前提を棄却していないとしても，少なくとも前提を驚くべきこととは見なしていると思われるので，(59)と(60)の対比と同じ扱いになる．

6) この文の容認度が低いのは，語用論的な要因によるものである．主語を適当なものにすれば十分自然になる．

(i)　女性はいつから煙草を吸うようになったんだ．

(76) Tanaka moto-shushoo **ga** nyuuin-shita. Taoreta no wa shigatsu 21-nichi (Lambrecht, 1988, p. 170)

(77) Suzuki-shushoo **wa** hoobee o oeru ni atatte Washington de dookoo-kisha-dan to kondan,… (*ibid.*)

日本語以外でも，驚くべき情報を表す場合には，主語名詞句が主題でないことを示す構文が用いられる．例えば，Lambrecht (1984, pp. 247-248) によると，朝，自動車に乗ろうとしたところ驚いたことにボンネットが開いているのに気が付いたという状況を報告する場合，ボンネットは先行文脈から自動車に関する一般常識によって容易に連想されるので主題として扱えそうだが，実際には，日本語では「が」が，口語フランス語では ya-cleft が，スペイン語では倒置が用いられる[7]．

(78) bonnetto ga aite iru no (Lambrecht, 1984, p. 248)

(79) ya le capot qu'est ouvert (*ibid.*)

(80) está abierto el capot (*ibid.*)

驚くべき情報を表す場合には主語名詞句を主題化しにくいという制約は，疑問文でも成り立っている．

(81) 太郎が来るか．

(82) 太郎は来るか．

ここでは，「は」に比べて，「が」は許容されにくい[8]．しかし，太郎が来ることに強い疑いを示す疑問文や，太郎が来ないことを述べる修辞疑問文では「が」も自然になる．これは，話し手が，「太郎は来ないだろう」と思った上で，「太郎が来る」という予測していない，驚くべき事態が起こるのかと問うているので，主語を主題化しない方が良いためと説明できる．

ほとんど同じことが，疑問詞疑問文についても言える．例えば，次の疑問文を比較されたい．

---

7) Lambrecht (1987)，Lambrecht (1988, pp. 165-171) も参照されたい．

8) この件に関しては，以下の文献を参照されたい．久野 (1973, pp. 214-215)，仁田 (1991, p. 133)，野田 (1996, p. 93)，安達 (1999, pp. 59-61)．

(83)　いつ太郎が来るの.
(84)　太郎はいつ来るの.

この場合でも，太郎が来ることに疑いがある場合や，来ないことを修辞疑問文で言いたい場合には，「が」が自然である．これは，話し手が「太郎がいつか来る」という命題が成り立っていたらそれは驚くべきことだと見なしており，驚くべき命題を表すには，主語が主題でないことを示す構文が用いられるからである．

同じ説明は，(72) (=(85)) と (73) (=(86)) の対比にも当てはまる．

(85)　いつから１２歳の子供が煙草を吸うようになったんだ.
(86)　?１２歳の子供はいつから煙草を吸うようになったんだ.

修辞疑問文の場合には，話し手は「ある時から１２歳の子供が煙草を吸うようになった」という前提が成り立っていたら驚きだと見なしているので，主題化を適用しない方がよい[9]．また，(65) (=(87)) と (66) (=(88)) のように，前提を棄却したり，

---

9) 以下の場合には主語を主題化していない文は不自然で，主題化している文の方が修辞疑問文として解釈されると判断する話者も存在する（京都大学の東郷雄二先生の御指摘による）.

(i)　いつから君が私より偉くなったんだ.
(ii)　君はいつから私より偉くなったんだ.
(iii)　いつからここが幼稚園になったんだ.
(iv)　ここはいつから幼稚園になったんだ.
(v)　いつから日本が警察国家になったんだ.
(vi)　日本はいつから警察国家になったんだ.

確かに，(i) は (vii) と比べて容認度が低く思われるし，(ii) は (viii) と比べて修辞疑問文として解釈しやすいと思われる.

(vii)　いつから平社員が命令するようになったんだ.
(viii)　? 平社員はいつから命令するようになったんだ.

これには主語名詞句の定性が関与していると考えられる．しかし，ここでは，主語の定性だけではなく，その他の要因も働いている．例えば，以下の文では，主語が「君」であるが，主語を主題化していない方が，修辞疑問文として解釈しやすい.

(ix)　{どうして/なぜ} 君が私より偉いんだ.
(x)　君は {どうして/なぜ} 私より偉いんだ.

このように，問題の現象は，主語の定性だけでは捉えられない．しかし，この問題は本稿の範囲を越えているので，これ以上の考察は行わない.

疑問に付したりせず，ただ単に前提に対して驚きを示すのにも，主語を主題化しない方がよい．

(87)　いつ息子さんが亡くなったのですか．
(88)　息子さんはいつ亡くなったのですか．

以上の議論を踏まえると，前提を棄却したり，疑問に付したり，驚くべきものとして扱う場合は，主語を主題化しにくいと結論づけることができる．このような場合，フランス語では文体的倒置が困難になることを考慮すると，フランス語の疑問詞疑問文における文体的倒置は，主語が主題である場合に適用できる操作であると考えた方が，その制約が自然に説明できる．

例えば，(59) (=(89)) と (60) (=(90)) の対比を考えてみる．

(89)　Quand ton fils est-il mort? (Cornulier, 1974, p. 158)
(90)　Quand est mort ton fils? (*ibid.*)

「息子さんが亡くなった」ということに驚きを示すには，主語の「息子さん」を主題化しない方がよいので，文体的倒置である (90) は不適切で，複合倒置である (89) は問題ないのだと説明できる．

また，(69) (=(91)) と (70) (=(92)) の対比も同様に説明できる．

(91)　Depuis quand un enfant de douze ans fume-t-il? (Le Goffic, 1997, p. 40)
(92)　* Depuis quand fume un enfant de douze ans? (*ibid.*)

「１２歳の子供がある時から煙草を吸うようになった」という前提がもし成り立っていたら驚きだということを示す修辞疑問文の解釈の場合には，主語を主題にしない方がよいので，文体的倒置である (92) は不適切である．これに対して，複合倒置である (91) はやはり問題ない[10]．

---

10) 修辞疑問文は，疑問符の代わりに感嘆符を伴うことがある (Grevisse, 1986, p. 164; 新英語学辞典, 1987, p. 1054)．

(i)　A quoi bon danser! (Grevisse, 1986, p. 164)
(ii)　What was not his astonishment on finding it! (新英語学辞典, 1987, p. 1054)

これは，修辞疑問文が，もし問題にしている事態が成り立っていたら驚きだということを表しているからだと考えられる．また，修辞疑問文においては，フランス語では条件法，英語では「驚きの

2.4. 英語の疑問詞疑問文におけるアクセント

ここまで，フランス語の文体的倒置による疑問詞疑問文の主語は，焦点ではなく，むしろ主題であることを示してきた．ところで，文体的倒置により文末に来た主語には，強勢がおかれることになる．この点で，英語の疑問詞疑問文における強勢アクセントが興味深い．

英語においては，強勢アクセントは焦点に来るのが一般的である．ところが，疑問詞疑問文においては，必ずしも焦点にアクセントが来るとは言えない．Lambrecht (1994) は，以下のような文において焦点と呼びうるのは疑問詞であると認めた上で，それにもかかわらず，強勢が文末の cookie や that に来ると述べている．

(93) Who ate the COOKIE? (Lambrecht, 1994, p. 282)

(94) Who's THAT? (*idem*, p. 283)

Lambrecht によると，これらの強勢は焦点を示すためのものではない．むしろ，文末の名詞句の指示対象を質問の対象として聞き手の意識にのぼらせて，トピックとして確立するためのものである．つまり，ここでは強勢を受けた名詞句がトピックであり，その指示対象について情報を要求しているのである[11]．

3. 疑問を発する上での重要度

3.1. 要求している情報の規定

疑問詞疑問文における文体的倒置は，主語が主題の時に可能だと仮定してきたが，これでは説明できない現象が存在する．

---

should」が使われることがある（朝倉, 1955, p. 111; 新英語学辞典, 1987, p. 1054; Schmidt-Radefeldt, 1977, p. 381）．

(iii) Qui *pourrait* en douter? (朝倉, 1955, p. 111)

(iv) Why *should* you stay here in this hot weather? (新英語学辞典, 1987, p. 1054)

これは，話者が，実際には成り立っていないだろうと思っている事柄を仮定して，それに対して驚きの感情を示しながら否定しているためと考えられる．

11) もし the cookie や that の指示対象が既にトピックとして確立済みならば，Who ATE them?や Who IS that?のように，代わりに動詞が強勢を受け，これらの名詞句は無強勢のトピックとなる（Lambrecht, 1994, p. 284）．このアクセント付与については，Lambrecht and Michaelis (1998) も参照されたい．

先ず，Korzen (1983, p. 58) や朝倉 (1981, p. 109) によると，指示代名詞 cela はほとんどいつも，複合倒置が適用され，文体的倒置はあまり適用されない．

(95) A qui cela profite-t-il? (Korzen, 1983, p. 58)

(96) ? A qui profite cela? (*ibid.*)

もし，疑問詞疑問文における文体的倒置が主題に適用される操作であるなら，cela のような主題性の高い代名詞は文体的倒置を適用しやすいはずだが，実際はそうではない[12)]．

また，1.3.節で見たとおり，(34) (=(97)) のように，直接目的語名詞句があると文体的倒置は容認されず，(32) (=(98)) のように複合倒置にしなければならない．

(97) * Où a rencontré Valérie Jean-Jacques? (Le Goffic, 1997, p. 26)

(98) Où Jean-Jacques a-t-il rencontré Valérie? (*ibid.*)

もし，疑問詞疑問文における文体的倒置が主語の主題性にのみ依存する現象ならば，文体的倒置が適用できるかどうかは，直接目的語の有無とは関係ないはずだが，実際にはそうではない．

これらの現象を説明するために，本稿では，以下のように考える．疑問詞疑問文は情報を要求するのに使われている．そして，文頭の疑問詞は要求している情報の範疇を示しているが，残りの部分は更にどのような情報を要求しているのかを規定している．例えば，«Quand arrivera François?» や «Quand François arrivera-t-il?» のような疑問文においては，文頭の疑問詞 quand によって時を尋ねているのが分かるが，どのような時を尋ねているかは残りの「フランソワが到着するだろう」という部

---

12) Korzen (1983, p. 82) は，cela が quelqu'un と同様にはっきりとした「個体」を指示していないので，それについて情報を要求することができず，文体的倒置が不自然になると考えている．確かに，cela は，普通の名詞句に比べれば，指示対象が漠然としていると言える．しかし，quelqu'un は，そもそも不定であるために，その指示対象について質問をすることが不自然であるのに対して，cela は，不定ではなく，指示しているものも分かっており，それについて質問が出来ないほど指示が漠然としているとは言えない．このことは，(49) (=(i)) で見たとおり左方転移による主題化が quelqu'un には適用できないのに対して，cela には適用できることからも言える．

(i) ? Quelqu'un, il a mangé ça. (Cornulier, 1974, p. 160)

(ii) Cela, je le comprends. (Chamfleury, *Les Aventure de Mademoiselle Mariette*, in *DISCOTEXT 1*)

よって，Korzen の説明は成り立っていない．

分によって規定される．ここで，疑問詞疑問文における文体的倒置に関して，次の仮説を提案する．

(99) 文体的倒置を適用された疑問詞疑問文においては，要求されている情報の規定において主語が重要であり，「媒介句」は，要求されている情報が主語によってどのように規定されているかという関係を示している．

ただし，「媒介句」とは，動詞と，wh 句よりも動詞により緊密に結びついている要素とをあわせたものである．勿論，wh 句自体が動詞に最も緊密に結びついている要素である場合には，媒介句は動詞だけとなる．1.2.節で見た，文頭に出ている wh 句よりも動詞との結びつきの強い要素は倒置主語の後に現れることはできないという Korzen (1983, 1996) の制約により，媒介句は疑問詞と倒置主語の間に現れる．これに対して，複合倒置に関しては，次の仮説を提案する．

(100) 複合倒置を適用された疑問詞疑問文においては，要求されている情報の規定において主語が重要であることはなく，疑問詞以外の部分が全体として要求されている情報を規定している．

以下，これらの仮説に基づいて，データを説明していく．

3. 2. 主語の重要度

さて，(46) (=(101)) で，不定代名詞 qulequ'un に対して文体的倒置を適用するのが困難であることを見た．

(101) ? Qu'a mangé quelqu'un? (Cornulier, 1974, p. 157)

このことは，(99) の仮定に従えば，以下のように説明される．この疑問文では，manger という動詞を用いているが，「食べる」と言えば，それは「誰かが」行う行為である．よって，主語に quelqu'un を使っても，何ら情報的な価値はない．つまり，どのような情報を要求しているかを規定する上で，主語は全く貢献していないことになる．このような主語には文体的倒置を適用できないのである．

それに対して，(45) (=(102)) のように主語を固有名詞 Pierre にした場合は，他の人でなくピエールが食べたものを問うているので，主語はどのような情報を要求しているかを伝えるのに貢献している．

(102) Qu'a mangé Pierre? (*ibid.*)

ここでは，媒介句である a mangé は，両者の間に成り立っている「食べた」という関係を表しているだけと見なせる．よって，文体的倒置が可能なのである．

他方，(96) (=(103)) のように，cela に文体的倒置を適用することも困難である．

(103) ? A qui profite cela? (Korzen, 1983, p. 58)

ここでは，cela の指示対象の意識内での活性度が極めて高いため，改めて疑問の出発点として取り立てる必要がなく，要求している情報の規定にとって余り重要でなくなる．それよりも，動詞 profiter の方が，要求している情報の規定にとってはるかに重要である．その結果，文体的倒置が困難になると考えられる[13)]．

ところで，Korzen (1983, p. 58) は，疑問詞疑問文で cela が倒置されにくいという特徴は，指示代名詞の本来の価値をより保持している ceci には当てはまらないと述べている．

(104) ? Combien a coûté cela? (Korzen, 1983, p. 58)

(105) Combien a coûté ceci? (*ibid.*)

---

13) 朝倉 (1981, p. 109) によると，次の場合は，(i) の複合倒置は非文法的に感じられ，(ii) の文体的倒置の方が自然である．

(i) Que cela {singifie-t-il / veut-il dire}? (朝倉, 1981, p. 109)

(ii) Que {signifie / veut dire} cela? (*ibid.*)

(ii) は，*DISCOTEXT I* でも用例が見つかる．これは，疑問代名詞 que がいつも無強勢で動詞と密接に結びつくためために，que と動詞の間に無強勢人称代名詞以外のものを挿入できないことにより説明される．

(iii) * Que, à votre avis, a-t-il fait? (朝倉, 1981, p. 103)

(iv) Que vous a dit le docteur Bouchon? (*ibid.*)

(i) では，que と動詞の間に，無強勢人称代名詞でない cela が介在しているために非文法的に感じられるのである．次の例も同様に考えることができる．

(iii) Qu'est cela? (Giraudoux, *Judith*, in 朝倉, 1981, p. 131)

このように，疑問詞が que である場合の cela の文体的倒置は，全く独立した要因によって説明されるため，ここでの議論には関与しない．

指示代名詞の本来の価値が，談話状況の中にある要素に聞き手の注意を引く直示的用法にあるとすると，ceci は cela と異なり，その指示対象を疑問の出発点として取り立てるのに適していると考えられる．すると，(105)が自然であることも，主語が質問をする上で重要な場合に文体的倒置を行えるという仮説から説明できる．同様に，1.3.節で見た(29)(=(106))において，主語の指示代名詞が，前方照応的な解釈よりも直示的な解釈の方がよいのは，前方照応的な要素よりも直示的な要素の方が質問をする上で重要なものであると考えることによって説明される．

(106) ? De quel œil voit double celle-ci? (Kayne, 1972, p. 103)

3. 3. 媒介句の性質

(97)(=(107))のように，直接目的語名詞句があると文体的倒置は容認されず，(98)(=(108))のように複合倒置にしなければならない．

(107) * Où a rencontré Valérie Jean-Jacques? (Le Goffic, 1997, p. 26)
(108) Où Jean-Jacques a-t-il rencontré Valérie? (*ibid.*)

これは，直接目的語名詞句があるために，要求している情報の規定にとって，媒介句の重要度が極めて大きくなるためと考えられる．ここでは場所を尋ねているのだが，それがどのような場所かを規定するのに，主語である「ジャン＝ジャック」に比べて，媒介句である「ヴァレリーに会った」の方が重要なのである．このため，文体的倒置に対する制約を満たせないのだと説明できる．

しかし，直接目的語があっても，動詞とイディオムを成していると，文体的倒置が可能になる．

(109) A quelle heure aura lieu la manifestation qui a été interdite par le gouvernement? (Kayne, 1972, p. 105)

ここでは，媒介句である avoir lieu というイディオムは，ただ単に「行われる」という意味を表している．よって，ここで尋ねられている時刻を規定するには，主語の「デモ」の方が重要になるので，文体的倒置が適用できる．

また，文体的倒置は，直接目的語以外の要素によっても，容認度が低下する．

(110) ? Quand deviendra célèbre ce comédien? (*ibid.*)
(111) ? A quelle heure changera d'avi cette fille? (*ibid.*)

これも，要求している情報の規定にとって，問題の要素を含む媒介句の方が重要だからと説明できる．ただし，この場合には，主語を長くして重要度を高めることによって，容認度を改善できる[14]．

(112) Quand deviendra célèbre le comédien que nous avons vu si bien jouer l'autre jour à la télévision? (*ibid.*)

(113) A quelle heure changera d'avi le prisonnier auquel la police est en train de faire subir des tortures inimaginables? (*ibid.*)

さて，(37)-(40) (=(114)-(117)) で見たとおり，文体的倒置は直接目的語の代名詞化によって，容認度が向上する．

(114) * Où ont mangé la tarte les invités? (Muller, 1984, p. 350)

(115) Où l'ont mangée les invités? (*ibid.*)

(116) * Quand a vu les gens Paul? (*ibid.*)

(117) Quand les a vus Paul? (*ibid.*)

これは，直接目的語代名詞の指示対象は既に意識にのぼっているので，それを改めて相手の意識にのぼらせる必要がなくなるため，要求している情報の規定にとっての重要度が低くなるのだと考えられる．その結果，媒介句全体の重要度も低下し，相対的に主語の方が重要になりうるので，文体的倒置が可能になるのだと説明される[15]．

---

14) 注2で見たとおり，このような容認度の改善は，直接目的語の場合にはほとんど無効である．

(i) * Où mettra ses livres cette fille? (Kayne, 1972, p. 105)

(ii) *? Où mettra ses livres la fille qui est entrée en retard? (*ibid.*)

このことから，直接目的語の場合には，それ以外の要素と異なり，別の要因が働いている可能性を否定できない．例えば，動詞の後に名詞句が二つ並んで，どちらが主語で，どちらが直接目的語か分からなくなるという構文解析上の困難を避けるという要因が働いているかもしれない(cf. Nordahl, 1973, p. 123)．

15) ただし，Le Goffic (1997, p. 27) によると，直接目的語が代名詞化されていても，文体的倒置が必ずしも自然になるわけではなく，複合倒置の方が自然である場合がある．

(i) *? Où l'a rencontrée Jean-Jacques? (Le Goffic, 1997, p. 27)

(ii) Où Jean-Jacques l'a-t-il rencontrée? (*ibid.*)

更に，媒介句の重要性が極めて低い場合は，文体的倒置が複合倒置よりも自然になる．

(118) Où se trouvent les îles Kerguelen? (Le Goffic, 1979, p. 29)
(119) ? Où les îles Kerguelen se trouvent-elles? (*ibid.*)

ここでは場所を尋ねているが，どのような場所を尋ねているのかを規定するのに，存在を表す動詞 se trouver よりも，存在物を示す主語名詞句の方がはるかに重要であるので，文体的倒置の方が望ましいのである．

媒介句の重要度が著しく低い場合には，文体的倒置が困難な主語でも文体的倒置が可能になる．上述のとおり cela は文体的倒置を適用しにくい．しかし，*DISCOTEXT 1* で検索したところ，(120)の複合倒置は7例確認されたのに対して，(121)の文体的倒置は8例確認された．

(120) D'où cela vient-il?
(121) D'où vient cela?

つまり，この場合には，主語が cela であるにもかかわらず，文体的倒置も自然なのである．ここでは，媒介句は由来の意味を表す動詞 venir である．ところが，前

(iii) * Ses 18 ans, quand les a eus votre fille? (*ibid.*)
(iv) Ses 18 ans, quand votre fille les a-t-elle eus? (*ibid.*)
(v) *? Le latin, quand l'ont parlé les Gaulois? (*ibid.*)
(vi) Le latin, quand les Gaulois l'ont-ils parlé? (*ibid.*)

Korzen (1983, p. 56)も，多くの話者にとって，(vii)は容認度が低く，(viii)の方がよいと述べている．

(vii) (Je n'arrive pas à trouver ce livre)
? Où l'a caché votre sœur? (Korzen, 1983, p. 56)
(viii) Où votre sœur l'a-t-elle caché? (*ibid.*)

つまり，直接目的語を代名詞化するだけでは，文体的倒置を適用するには十分ではない．確かに，文体的倒置を妨げる直接目的語名詞句を代名詞化することにより，要求している情報の規定にとっての重要度は減少するが，このことから直ちに主語の方が媒介句より重要だということにはならない．上の例では，主語が媒介句より重要にはなっていないので，複合倒置の方が適切なのだと考えられる．

置詞 de が既に起点の意味を表している．そのために，媒介句の重要度が著しく減少しており，文体的倒置が可能になっていると考えられる．

ところで，1.2.節で，文体的倒置が可能になるためには，事態を構成する要素を表す wh 句の前置が必要であることを見た．このために，(12)(=(122))のように，事態の一部ではない原因を表す疑問副詞 pourquoi を前置しても文体的倒置は不自然で，(13)(=(123))のように複合倒置を適用しなければならなかった．

(122) * Pourquoi partira cette petite? (Korzen, 1983, p. 52)

(123) Puorquoi cette petite partira-t-elle? (*ibid.*)

このことも，(99)の制約によって説明される．

文体的倒置においては，媒介句は，主語が疑問詞をどのように規定しているかという関係を示すものでなければならない．疑問詞が事態を構成する要素である場合には，媒介句はそのような関係を表しうる．しかし，原因のように事態の外部にあるものである場合にはそうはならない．その場合には，むしろ事態が全体として，要求されている情報を規定しており，むしろ，(100)の複合倒置に対する制約に合致しているので，複合倒置が適切になる．

3.4. 主題性と重要度

本節では，疑問文においては，主題が，焦点や他の部分よりも，疑問を発する上で重要になりうることを見る．

さて，Alexandre Dumas の *Le Comte de Monte-Cristo* に出てくる以下の対話を見られたい．囚人である Edmond Dantès に正体不明の声が質問してくる場面である．

(124) - Qui êtes-vous vous-même? Demanda la voix.
- Un malheureux prisonnier, reprit Dantès qui ne faisait, lui, aucune difficulté de répondre.
- De quel pays?
- Français.
- Votre nom?
- Edmond Dantès.
- Votre profession?
- Marin.
- Depuis combien de temps êtes-vous ici?
- Depuis le 28 février 1815.

- Votre crime?
- Je suis innocent.
- Mais de quoi vous accuse-t-on?
- D'avoir conspiré pour le retour de l'empereur.
(Dumas, A., *Le Comte de Monte-Cristo*, in *DISCOTEXT 1*)

この対話の４行目の «De quel pays?» という発話は，文としては不完全な形をしている．欠落部分を補うとすると，例えば次のようになるであろう．

(125) De quel pays (êtes-vous)?

この場合，実際の発話では，wh 句だけを残し，後は省略していることになる．このことは，この発話においては，êtes-vous によって相手について疑問を発していることを明確にするよりも，de quel pays によって出身地を尋ねていることを伝達する方が重要であることを示している．つまり，wh 句の部分が重要なのである[16]．

他方，既に見たとおり，疑問詞疑問文の焦点は疑問詞の部分であった．よって，上の例は，焦点が最も重要であるという考え方と矛盾しないと思われるかもしれない．しかし，６行目の «Votre nom?» も文としては不完全な形をしているが，欠落しているのはむしろ疑問詞と動詞である．欠落部分を補うと，例えば次のようになるであろう．

(126) (Quel est) votre nom?

つまり，焦点である疑問詞の部分よりも，主語の votre nom の方が重要であるということになる．そして，この主語は主題であると考えられる[17]．実際，日本語で同じような省略を考えると，残った部分には主題を示す「は」が付加されている．

(127) あなたの名前は(何ですか)．

---

16) ここで問題にしているのは，先行文脈との同一性に基づく省略現象ではない．よって，復元の一意性も保証されてはいない．しかしながら，言語化されなくとも了解される事柄よりも，言語化されている事柄の方が重要であるということは変わらない．

17) Bolinger (1982, pp. 15-16)は，«Your name?» のような不完全な疑問文を考察し，このような質問がトピックに，そしてそれに対する返答がコメントに相当することを示唆している．

これに対して，逆に主題の方を省略して，疑問詞の方を残した形式を使える状況はかなり考えにくい．

(128) Quel?
(129) 何ですか．

このことは，名前を尋ねる状況においては，一般的に，「あなたの名前」を疑問の主題として取り立てることが，それが「何か」を尋ねていることを明確にすることよりも重要であることを示している．

８行目の «Votre profession?» や１２行目の «Votre crime?» においても，「あなたの職業」や「あなたの罪」を疑問の主題として取り立てることが，疑問を発する上で重要であると考えられる．このように，疑問詞疑問文において，主題が疑問を発する上で最も重要になりうるのである．

ここで興味深いのは，日本語で，「…は」という主題だけの発話があった場合，疑問として解釈されることである[18]．

(130) A：太郎は(どうしたの)．
B：今日は来ないよ．

主節平叙文では，焦点が重要であり，その焦点を省略して主題の方を残すことはありえない．しかし，疑問詞疑問文では，焦点よりも主題の方が重要になりうるために，主題のみを残すことが可能なのである．よって，主題だけの発話は疑問として解釈されるのである．

2.4.節で見たとおり，Lambrecht (1994) によると，(93) (=(131)) や (94) (=(132)) では，強勢は焦点である疑問詞ではなく，主題の方に来ている．

(131) Who ate the COOKIE? (Lambrecht, 1994, p. 282)
(132) Who's THAT? (*idem*, p. 283)

---

18) 「…は」という発話の疑問でない解釈としては，次のような対比を強調する場合が考えられるだけである．

(i) A：今日は来ないの．
B：うん，今日は．

これらの強勢は，指示対象をトピックとして確立するためのものである．一般に，強勢は重要な要素を示すために使われるとするならば，このような例文も，疑問詞疑問文において主題が重要になりうることを示唆している．

以上の観察を，主節平叙文と疑問詞疑問文の機能に基づいて説明すると以下のようになる．先ず，主節平叙文は，典型的には，聞き手に新たな情報をもたらしているので，新たな情報の部分が重要だと考えられる．これは，いわゆる焦点と一致する．しかし，疑問詞疑問文は，既知の前提から未知の情報を要求しているので，どのような情報を要求しているのかを伝えるのに寄与している部分ほど，重要だと考えられる．よって，主語の主題性が高ければ，情報要求の出発点として重要になりうるのである．

3.5. 文体的倒置による修辞疑問文

2.2.節で見たとおり，(60) (=(133))には信じられない出来事だという感情が出ていない．

(133) Quand est mort ton fils? (Cornulier, 1974, p. 158)

文体的倒置を用いると主語を疑問を発する上で最も重要なものとして扱うことになるが，ここでは，このことは主語を主題として扱うことを意味する．既に述べたとおり，疑問詞疑問文において主語が主題だと，前提に対して驚きを示さないことになる．また，(70) (=(134))は修辞疑問文として解釈できない．

(134) * Depuis quand fume un enfant de douze ans? (Le Goffic, 1997, p. 40)

この例でも，主語を主題として扱っているために，前提に対して驚きを示さず，修辞疑問文としての解釈が不可能になっていると考えられる．

ところが，修辞疑問文においても文体的倒置が適用されている場合がある．例えば，Le Goffic (1997, p. 41) 自身が，以下のような例を挙げている．

(135) Quelle ne fut pas ma surprise! (Le Goffic, 1997, p. 41)

この文は，感嘆符が付いていることから，感嘆文であって修辞疑問文ではないと思われるかもしれない．しかし，修辞疑問文は，もし前提が成り立っていたら驚きであるということを表しているので，疑問符の代わりに感嘆符を伴うことは普通であ

る[19]．また，次の文は疑問符を伴っており，修辞疑問文と認めざるをえないが，文体的倒置が適用されている．

(136) Quelle ne serait pas la valeur d'un musée où l'on pourrait se rendre compte de la culture latine, dans l'antiquité, au moyen âge et aux temps modernes? (Apollinaire, *Chroniques d'art*, in Grevisse, 1986, p. 627)

しかも，(135)を解釈するには，修辞疑問文と同じ手順で解釈しなければならない．

先ず，驚きという感情にとっては，その大きさが最も顕著な属性である．そこで，感情の大きさの尺度 G_1，G_2，…を設定する．ただし，ｉが大きいほど，G_i が表す感情の大きさも大きいとする[20]．そして，感情ｘの大きさが G_i に達していることを $g_i(x)$ と表すことにする．すると，(135)は，文字通りには，私の驚きｓに対して，$g_n(s)$ が偽となるようなｎを尋ねていると解釈できる．これは，$g_n(s)$ となるようなｎが存在していることを前提としている．この疑問文を修辞疑問文として解釈すると，前提を否定することになるので，全てのｉについて $g_i(s)$ が真となることを表していることになる．これは，どれだけ大きいｉを選んでも $g_i(s)$ が真となること，即ち感情ｓが際限なく大きいことを表している[21]．よって，「私の驚きは限りなく大きかった」という解釈が出てくるのである[22]．このように，(135)は修辞疑問文と考えることにより，正しい解釈が得られるので，修辞疑問文と考えるべきである．

---

19) この点については，注 10 を参照されたい．

20) ここでの議論は，Levinson (1983, pp. 132-136) の scalar implicature に関する議論を参考にしている．そこでは，尺度 $\langle e_1, e_2, e_3, \ldots e_n \rangle$ を設定する場合，〈all, most, many, some, few〉，〈n, … 5, 4, 3, 2, 1〉，〈always, often, sometimes〉，のように，ｉが大きいほど，e_i が表す程度は小さくなるようにしている．本稿では，説明の都合によりこの順序を逆にしてあるので注意されたい．

21) 日常的な直感では，$g_n(s)$ が真なら，ｎと異なるｍに対しては $g_m(s)$ は偽となると思われるかもしれない．もしそうなら，すべてのｉについて $g_i(s)$ が真となることはありえないことになる．しかし，これは正しくない．なぜなら，一般にｎ＞ｍなら，$g_n(x) \rightarrow g_m(x)$ であるからである．ｎ≠ｍなら $g_n(x) \rightarrow \neg g_m(x)$ だという日常的な直感は，会話の含意に過ぎない．この点については，Levinson (1983, pp. 132-136) の scalar implicature に関する議論を参照されたい．

22) 次の英語の修辞疑問文も，全く同じ手順により解釈される．

(i) What was not his astonishment on finding it! (新英語学辞典, 1987, p. 1054)

Le Goffic は，この例を属詞 quel には必ず文体的倒置が適用されるという制約から説明することを示唆している．しかし，文体的倒置の適用を強制する要因が存在しないにもかかわらず，文体的倒置が適用されている修辞疑問文が存在する[23]．

(137) Dans cette âme, pleine et comble des dons vivants de la nature, comment ne viendrait pas l'amour? Une chose aimée surgit…, d'où vient-elle? On ne peut le dire. Elle est aimée, il suffit…
(Michelet, J., *Le Peuple*, in *DISCOTEXT 1*)

ここでは最初の文は修辞疑問文として解釈される．

これらの修辞疑問文に文体的倒置が適用されているのは，媒介句の意味内容が乏しく，相対的に主語の方が疑問を発する上で重要になっているためと考えられる．

(135)では，媒介句はコピュラであり，その意味内容はほとんど無い．それに比べて，主語の方が疑問を発する上ではるかに重要であるので，文体的倒置が適用されている．しかし，主語が重要だと言っても，あくまでも意味内容のほとんど無いコピュラと比べてのことであり，それを主題として扱うほどではない．よって，修辞疑問文として解釈しても問題ないのである．

(137)では，媒介句に現れている動詞 venir は主語の指示対象が生じることを表しているだけであり，やはり意味内容が乏しい．このような媒介句に比べると，主語は疑問を発する上で十分重要となりうるので，文体的倒置が可能になっていると考えられる．しかも，主語は主題として解釈される必要はなく，修辞疑問文としての解釈も問題ない．ただし，動詞 venir はコピュラ動詞ほどには意味内容が乏しくないので，主語と重要性において競合しうる．その結果，同じ文脈において，複合倒置も用いることができる．

(138) Dans cette âme, pleine et comble des dons vivants de la nature, comment l'amour ne viendrait-il pas? […]

---

23) (135)も(137)も否定が掛かっているが，このことは文体的倒置による疑問文が修辞疑問文として解釈される条件にはなっていない．例えば，以下の口語フランス語のデータを見られたい．

(i) (…) y a certains professeurs qui euh … qui acceptent … euh que … que les enfants à l'éc à l'école euh les tutoient euh … je dis *où est l'inconvénient* si? mais moi je n'accepte pas que les enfants me tutoient … tu vois (…) (Coveney, 1995, p. 156)

ここで，イタリック体の部分は修辞疑問文であるが，否定は掛かっていない．

実は，複合倒置の方が適切なぐらいなのであるが，重要なのは，元々の文体的倒置でも修辞疑問文の解釈が得られることである．

これらの例に対して，(133) (=(139))や(134) (=(140))の媒介句に現れている動詞 mourir や fumer は，それほど意味内容が乏しくない．

(139) Quand est mort ton fils? (Cornulier, 1974, p. 158)

(140) * Depuis quand fume un enfant de douze ans? (Le Goffic, 1997, p. 40)

このような場合に文体的倒置を適用していると，主語をそれらの動詞よりも疑問を発する上で重要なものとして扱っていることになる．これは，主語を疑問の出発点となる主題として取り立てていることを意味する．そのため，驚きの感情が出ていなかったり，修辞疑問文として解釈しにくかったりすると考えられる．

4. 結語

フランス語の疑問詞疑問文における文体的倒置は，主節平叙文の場合と異なり，主語の焦点化とは考えられない．それどころか，むしろ，疑問詞疑問文における文体的倒置は主語が主題であるときに適用されると考えるべきである．その根拠として，以下の事実を挙げた．a)不定代名詞に文体的倒置を適用すると不自然である．b)前提に対して驚きを示したり，疑問に付したり，棄却したりする場合には，文体的倒置を適用すると不自然になる．また，このようなフランス語の疑問詞疑問文における文体的倒置と，日本語の疑問詞疑問文における主語への「は」の付加や，英語の疑問詞疑問文における主語への強勢の付与との平行性も指摘した．

しかしながら，このような考え方では，説明できない現象が出てくる．そのため，文体的倒置を適用された疑問詞疑問文においては，要求されている情報の規定において主語の方が重要であり，「媒介句」は要求されている情報が主語によってどのように規定されているかという関係を示していなければならないという制約を提案した．これにより，以下の事柄も説明できるようになった．c)cela のように主題性が高すぎる主語は文体的倒置を適用しにくい．d)動詞が直接目的語名詞句等を伴っていると文体的倒置が困難になる．e)疑問詞が pourquoi だと文体的倒置ができない．f)文体的倒置が適用された疑問詞疑問文でも，動詞の意味内容が乏しいと，修辞疑問文になりうる．

[資料出典]

Discotext 1 (1992), Paris, Hachette.

[参考文献]

安達太郎 (1999):『日本語疑問文における判断の諸相』, くろしお出版.

朝倉季雄 (1955):『フランス文法辞典』, 白水社.

——— (1981):『フランス文法ノート：基本語の用法』, 白水社.

Bolinger, D. (1982): "Nondeclaratives from an Intonational Standpoint," *CLS: Papers from the parasession on nondeclaratives*, pp. 1-22.

Comrie, B. (1981): *Language Universals and Linguistic Typology*, second edition, Chicago, The University of Chicago Press.

Cornulier, B. de (1974): "'Pourquoi' et l'inversion du sujet non clitique," in *Linguistische Arbeiten*, C. Rohrer et N. Ruwet. (éds.) *Actes du colloque franco-allemand de grammaire transformationnelle* I. Études de syntaxe, Tübingen, Niemeyer, pp. 139-163.

Coveney, A. (1995): "The Use of the *QU*-Final Interrogative Structure in Spoken French," *Journal of French Language Studies* 5 (2), pp. 143-171.

Croft, W. (1990): *Typology and Universals*, Cambridge, Cambridge University Press.

Dik, S. C. (1997): *The Theory of Functional Grammar*, Part 1, second, revised edition, Berlin, Mouton de Gruyter.

Givón, T. (1979): *On Understanding Grammar*, Orlando, Academic Press.

——— (1990): *Syntax: A Functional-Typological Introduction*, volume II, Amsterdam/ Philadelphia, John Benjamins.

Grevisse, M. (1986): *Le bon usage*, douzième édition refondue par André Goosse, Louvain-la-Neuve, Duculot.

Kayne, R. (1972): "Subject Inversion in French Interrogatives," in J. Casagrande & B. Saciuk (eds.) *Generative Studies in Romance Languages*, Rowley, Mass., Newbury House, pp. 70-126. [仏訳：Kayne, R. (1973) "L'inversion du sujet en français dans les propositions interrogatives," *Le français moderne* 41, pp. 10-42, 42, pp. 131-151.]

Korzen, H. (1983): "Réflexions sur l'inversion dans les propositions interrogatives en français," *Revue romane* 24, numéro spécial, pp. 50-85.

——— (1990): "Pourquoi *Pourquoi* est-il différent?" *Langue française* 88, pp. 60-79.

——— (1996): "L'unité prédicative et la place du sujet dans les constructions inversées," *Langue française* 111, pp. 59-82.

久野暲 (1973):『日本文法研究』, 大修館書店.

Lambrecht, K. (1984): "A Pragmatic Constraint on Lexical Subjects in Spoken French,"

CLS 20, pp. 239-256.

——— (1987): "Sentence Focus, Information Structure, and the Thetic-Categorical Distinction," *BLS* 13, pp. 366-382.

——— (1988): "Presentational Cleft Constructions in Spoken French," in J. Haiman and S. A. Thompson (eds.) *Clause Combining in Grammar and Discourse*, Amsterdam/ Philadelphia, John Benjamins, pp. 135-179.

——— (1994): *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge, Cambridge University Press.

——— and L. A. Michaelis (1998): "Sentence Accent in Information Questions: Default and Projection," *Linguistics and Philosophy* 21, pp. 477-544.

Le Goffic, P. (1997): "Forme et place du sujet dans l'interrogation partielle," in C. Fuchs (éd.) *La place du sujet en français contemporain*, Louvain-la-Neuve, Duculot, pp. 15-42.

Levinson, S. C. (1983): *Pragmatics*, Cambridge, Cambridge University Press.

Muller, C. (1984): "L'inversion du sujet clitique en français et la syntaxe du sujet," *Lingvisticæ Investigationes* 8 (2), pp. 335-362.

仁田義雄 (1991):『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.

丹羽卓 (1982):「現代フランス語の主語倒置：その構造と機能」,『フランス語学研究』第 16 号, pp. 29-38.

野田尚史 (1996):『「は」と「が」』, くろしお出版.

Nordahl, H. (1973): "Inversion et progression dans la subordonnée relative en français moderne," *Le français moderne* 41, pp. 113-130.

Raymond, W. and K. Homer, (1996): "The Interaction of Participant Role and Pragmatic Function in the Selection of Question Form," *BLS* 22, pp. 316-327.

Rochemont, M. S. and P. W. Culicover (1990): *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge, Cambridge University Press.

Schmidt-Radefeldt, J. (1977): "On So-Called 'Rhetorical' Questions," *Journal of Pragmatics* 1, pp. 375-392.

新英語学辞典 縮刷版 (1987), 研究社.

東郷雄二・大木充 (1986):「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」,『フランス語学研究』第 20 号, pp. 1-15.

Stylistic Inversion in French WH-Questions

Tohru HIRATSUKA

Abstract

It is widely accepted that the subject of stylistic inversion constructions is the focus, but it cannot be the case in French wh-questions because it is inferred from cross-linguistic evidence that it is the wh-word that is the focus in a wh-question. On the contrary, there is sufficient evidence to show that stylistic inversion is applicable to a wh-question when the subject is the topic: a) the indefinite pronoun *quelqu'un*, which cannot be a topic, is difficult to postpose, b) stylistic inversion is not used when the speaker shows surprise at the presupposition of the question, reappraises it, or denies it. Stylistic inversion in French wh-questions has some similarities to *wa*-adjunction to the subject in Japanese wh-questions and stress assignment to the subject in English wh-questions.

However, there are phenomena that cannot be explained by the hypothesis that the subject is the topic in French wh-questions with stylistic inversion. A more plausible hypothesis is that stylistic inversion is possible in wh-questions if the subject is important to determining what information the speaker requires and the verb (with a complement connected to it more closely than the wh-word is, if there is one) shows how the subject determines the required information. This hypothesis can explain the following facts in addition to a) and b): c) the demonstrative *cela* is rarely inverted because its referent is so topical that it is not necessary to activate it in the addressee's mind, d) a direct object NP blocks stylistic inversion, e) stylistic inversion is impossible when the wh-word is *pourquoi*, f) wh-questions with stylistic inversion can be interpreted as rhetorical questions if the semantic content of the verb is extremely light.